

特36

84

月庵和尚假名法語 完

019419-000-5

特36-84

月庵和尚假名法語

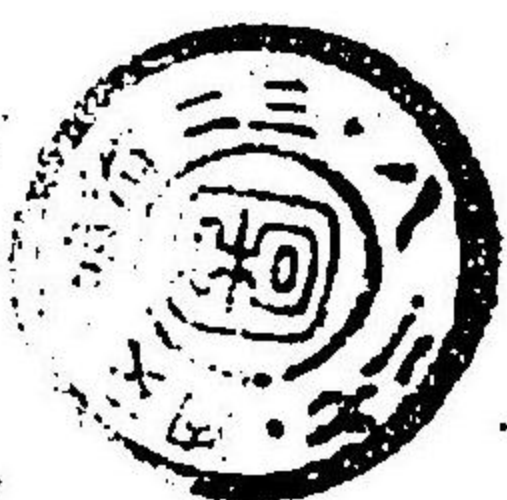
月庵 和尚 / 著

M23.8

ABG-0127



再刻月菴禪師法語と序



文の清本  
季の磨  
の至宝なるを然るに其流  
初至之寶成視多と出流

と書きたるは其の五巻の樂しみを

以て書上は其の寶と稱行たるは是

是は建武中其系しみなるといふは  
至樂に思ふるなりと此は歐州に我國  
に次ぎてしよと云ふは支那に秘傳し  
開化と云々嘆せざるも奈何せむと我海  
軍は海軍を地政神て滅絶せんとす是  
を以て此冊子にあらんとし五百年前既に

持たしよるは色階位といふこと其國  
も顧み處は人々とのやうに次進ま  
ず其をせむと欲する人ありは階位を  
たしむるは色階位なりと我位階を  
之れを以て海軍神とす再々持たし  
せむと我位階し余に一往を返せん

子物後よ余白しと存く此冊子此  
りまをさるゝのまはのまをさるゝとまは  
於物由すは様解なるも故是言報院  
は能く及らるゝに存す再特をまも  
渡り五百年は常貨となんこのま  
住居をさるゝと能くも此冊の存

在中のまをさるゝのまをさるゝ  
まをさるゝとまをさるゝと存く  
まをさるゝとまをさるゝと存く  
まをさるゝとまをさるゝと存く  
まをさるゝとまをさるゝと存く  
まをさるゝとまをさるゝと存く  
まをさるゝとまをさるゝと存く

おぼへしはしるべしとて  
存せしめてはらるるを街らるるに  
にたてしるべし何の者ぞ清き経  
故獲るるは

おぼへしはしるべしとて

大道廣然よむ。孫のたのむる  
むるもて。まじく。廿四為佛法の  
火之古指のまじく。一。一。一。  
のしるべし。まじく。まじく。まじく。  
悪る。まじく。まじく。まじく。  
句。まじく。まじく。まじく。  
まじく。まじく。まじく。まじく。



شاه جهان در کتب خود

مصر و بلاد عرب را

بسیار از کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

۱۱

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

در کتب خود در کتب خود

۱۲

月菴和尚假名法語

示宗如禪尼

夫道廓然とて本より示すべきもなく。またあきらむ  
るものもなし。只一人一念自迷ふて。種々の業をつくり。六  
塵に染着して。是れ佛祖世に出て。是れ救ひ給へり。衆生根  
機。別より更し道理なし。利根上智の人。頼り佛祖の位を  
こえて。一切の法は拘らざり。鈍機下劣の者。聞共不信見

まども不貴。只目前の營はりて。後世の事を不知。たま  
く善知識のすゝめによりて。少きも生死を恐るゝ心有  
ども。又有相の行。執着して。無上道にむかはず。たとへ坐  
禪工夫する人も。或は妄念妄境をいとひ。或は無念無心よ



住し。又は有無に拘らざるとおもひ。又はゆるくの見を  
となきたるとおもふて。眞實の志をおこさず。むなしく光  
陰をおくる。俄に死にのぞんで。病苦いたくせむるとき。前  
後茫茫として。平生の伎倆。すべてもちひ得ず。とじめて驚怖  
て。千萬後悔すれども叶たき。古人是を渴しのぞんで。井を  
ほる。またとへたり。それ人身うけおたたく。佛法あひおたたく。  
相搆て大願力を起し。三寶よも深く祈誓して。自由いたく  
恥しめて。今生よはやくあきらむべし。來世を期すること  
なれ。汝も此理を信じて大事を。とけんともは。な  
よとも不知所に急々に眼をつけて。不知所にも不止。又  
るところにも不向直に見直にきひめよ。更よ路もなく。心  
もおよはずと。おもふて退屈するとなる。教の外よさを

りあることを信じて。行住坐臥。いはらくもさしおろす。急  
々に志をそめて。よく用心せば。かならず女身を變  
せ。當所よ解脱して。生々世々大安樂なるべし。うたふ  
となれ。又一偈をしめす

汝求直指

曲說如是

只要開門

莫認瓦字

示慈雲禪尼

世間を無常也。一切不住。たとへば夢幻泡影の有。似て實  
あきむを。世人を此理を不知して。實は我有とをもふ  
て。諸の食欲執心深く。名聞利養をあたはたり。只今生の事は  
かり思ふて。明暮妻子眷屬衣食財寶のいとなみ。心を盡  
すばかりにて。時々生死の到來し。念くよ殺鬼のをか  
せむるを。をいらす。病難たちまち。いたりて。報命終らん

とする時、いじめて驚き、後生たすらん事ををへども、  
 すべてかひなし。只茫茫として、死するのみなり。此故に悪  
 道におちて、平生所作の業、因來りむくひて、種々の苦をう  
 け、身をやぶり心をくたきて却を歴、生をかさぬまごも、浮  
 およかたし。實にあはれむべきものなり。此理を知らずし  
 て、破戒無慚邪見放逸のものを、人中の鬼畜といふ。是をお  
 それ、是をなげきて、佛をあめ、法を信じ、僧を供養し、もろ  
 くの善事をなして、世間暫時の相よ書せず、ひとへは生  
 く世にたすらん事ををふ。是をことに智ある人とい  
 ふなり。雖然、只世間の善事を行するばかりにて、菩提心な  
 きは、有相の痴福となりて、輪廻の業をまぬかれず。内よ善  
 提心を起して、外よ善行をかさね修する。是内外相應の功

煩わつらひ  
 難はなやむと  
 願う万事につ  
 けてもとめ  
 んとして心を  
 くだきわづら  
 ぬ是願もと  
 めて成就して  
 後又なやま  
 ざる是願なり  
 又不成就なれ  
 は猶さらなや  
 む今日の事  
 皆々いふの如  
 し

徳也。そもくいかんがして菩提心をおこさべきとならば、  
 先世間の相は本より非相なりと信じて、見聞覺知に於て、  
 有とおもはず。無とおもはず。生とおもはず。滅とおもはず。  
 諸の道理をさし、料簡分別をあすべからず。たとひ妄念暫  
 時おこるとも再びつひつひ。又かへり見るとならば。如是を  
 らば諸のことよ於て執着住着あるべからず。是先菩提よ  
 入道なり。こゝにおいて又茫茫として、何ともおらず。とり  
 つく處なしとおもひてうたひをなす。退屈するとなか  
 れ。すこしきも。とりつく所あれ。皆輪廻の業なり。なよと  
 もいらざる即生死をいで、煩惱はなる、所なり。只如是  
 深信して何ともはありがたき所。直に眼をつけて、行住  
 坐臥念に不怠志を進てきはめて見よ。ならずさとする時

節あるべし。是と菩提心をおこして。現身に成佛する人といふなり。たとひ今生よてさとする事おそいといふとも。此信力つよくんば。諸の悪業を轉トて。永劫人身を失せず。願心を成就し。大安樂地よいたるべし。うたのみ事なるれ

示宗三禪閣

大道方所なし。目前を離れぎ。心法かさちなら。物に即して。即是也。一念不生なれば。脱體顯露す。疑心わづかよおこれ。是非紛然たり。是非紛然たれば。六道現前す。疑心休歇す。れば。生死なむく離る。夫疑心おこるとい信力よわきによ。信力つよき時。只一念なり。一切一念おれば。諸の事は。於てへたつる思ひなし。へたつるおもひなければ。目前の萬境一切善悪さらよいかんとあるを覺へず。只一片地

のみなり。又何ぞ疑ひのおこらんや。雖然信力猶よわくして。疑心や。おこらば。是をやめんとするをなかれ。たゞ疑心のおおるところよ付てたちのへり見よ。そも此疑心。是なよぞと。如此行住坐臥。一切作用の時。わする。事あく。おこたるをなく。急くよ眼をつけてよく。きはめて見よ。のならず。忽然として。一笑の時節あるべし。重て示一偈。生死去來。棚頭傀儡。一線斷時。落々磊々。

示宗清禪閣

我心本來清淨なるを。青天白日の一點の曇なきがごとし。森羅萬象一切の有情無情は。皆是此ひかりの轉變也。すべて實躰あるをなし。是を悟を佛といふ。是よまよふを衆生といふあり。迷悟は妄心の分別あり。佛と衆生と更に別體

なむ。もし人かくのごとく當下に開悟すれば。一念の工夫をからず初心即正覺の佛也。さらさら何ぞ坐禪修行を勞せん。見聞覺知行住坐臥一切時中著しく活脱三昧現成受用の所なり。汝若未悟只如是直下信受し何ともりともいらざる所にむつて。念と志をすゝめて。我心の根元いりんと極め見るべし。極めくいていりんとせざる時志をゆるくするとなり。彌らすんは。彌すゝむべし。たとひ又今生にて明らむるをなくとも。此信力よりて。來世さだめて大解脱の處にいたるべし。疑ふとなられ

示存上人

道にむろふその誠を存するに過たるはなし。誠を存する時は。萬緣萬境皆即道よして。此外別は無道。不存時の目よ

ふきて道を得。動は妄念を除て道を明むべしと思へり。此故。是をとり。非をきて。妄をいとひ。眞をもとめて。日々に夜くよ心をくるしますはあり。悟るをなし。只今生むなし。きののみ。あらき。千生萬劫惡趣に浮沈して。苦をうくる。とやまき。まてにあれむべし。然も誠といふをば。聞とも。實よまての理をさる人まれなり。夫まていふにふたつの心なきをいふなり。二の心なきといふは。是は是にして。是の道理なし。非は非にして。非の道理なし。生と生と。あて。生の道理なき。死に死にして。死の道理あり。乃至一切の念。其ものよ即して物に即する道理なし。只直に見直に聞て。さらにふたゝび頭をめぐらさき。即汝の本來面目現成の時節あり。是をしはらく二の心ありといふ也。萬法



はひ茂のみ明暮いとなむほごに。心もつかれ身もくるこ  
く萬につけてむつかしき事たえず。又富る人は彌財寶茂  
もちかさねんとをもふほごに。利錢賣買萬の事茂あして。不  
斷あき足らね茂もひあり。貧者は我身一身茂も助たけ  
れは。妻子眷屬までも扶持しおたくして。とかくに明暮案す  
れども案出したるとなければ。盗をもせばやと茂もへど  
も。夫亦命をうこなふ事なれば。をそろしくをもふてせら  
れず。乞食なとも亦一身の事ばかりにてもなければ。それ  
も亦かなはず何ともかともする方便なくして。あけくま  
なげさかなとむばかり也。善につけても悪につけても。人  
間の事は。苦は多く樂は少し今の苦は。即後世の地獄餓鬼  
畜生修羅諸の惡道の業と成て。我身を燒焦はむら。又さり

さく劍となるべし。すべて他人の仕出たる禍に  
非ず。只我心遣ひも。身の行跡も。悪に依てかゝる苦をうけ  
て。生々世々惡道に浮沈なり。譬又人間に生れ。位貴き人。富  
るものとあり。或は天上に生れて。萬の樂をうくまごも。是  
實の道心なくして。名利のための善根をあしむくひな  
れば。一旦の樂ばかりにて。死すれば又惡道におつ。是も始  
終たのこむべからず。是皆善惡のかはりあれども。心悪く  
持によつて。直に佛法をさとらず。輪廻生死をまぬかれざ  
るものなり。抑心をよくもち身をよくふるまふといふ。  
いかなるをぞや。夫我心に我身。また生れず。父母の縁も  
なかりとさきに。明々了々とてかくれずくらまさず。迷  
はずさはりなきもの也。上佛祖とおなじく。下一切衆生。乃

至心なき草木までも同體にして。更に二ツもなく。三もな  
く。此心天然にして私なき故に。佛に於てもまさる事なく。  
凡夫にありても減ずることなし。諸の善惡に於てもへた  
てなく僧俗にありても異なるをなし。かくのごとくすぐな  
る事をしらすして。佛をば貴くおもひ。衆生をば賤くおも  
ふより。我心のすぐなることをもわきまへず。本より  
生死なき事をもしらす。朦々々々としてあかしくらすの  
み。是即生ながら閻地獄におちたるものなり。此閻やみを  
はなれて。やめて明らかなる佛心にならんとおもはゞ只  
一切善惡是非の思ひを捨て。我身のいまだうまれざりし  
さきの心は。そもいかなるものぞと起居にわすれず。念々  
極て見べし。若又一切の事にあへばむづかしくまぎるゝ

とあらは。しづかなる所に坐して。先香をたき佛を三度拜  
し。其後手をくみ。足を組坐すべし。手の組やうは。先右の手  
をあふむけ下におきて。左の手をあふむけて上に重ねて。  
兩方の大指のかしらを。さしあはすべし。足は左の足を右  
の足の上にかさぬべし。目は半許あけて。口をばふさぎて。  
齒をくひ合せて。舌をば上の腭に付て。おく齒をよくくひ  
結て。背をまぐに立て。心をつよくもちて。先にしめしたる  
ごとく。我もいまだうまれぬさきの心は。いかなる物ぞと。念  
々うたひひきはめて見るべし。かやうに坐しても臥して  
も。萬事をなすときも。わすれず用心するを工夫といふ。か  
くのごとく坐禪工夫しておこたりなきを。心も身もよくふ  
るまふ人といふなりかやうにねんごろにさしおかす。さ

はめ見は。必ず我心の源をさとるべし。心の源をさとりぬ  
 れは。本より佛もなく。衆生もなく。我もなく。人もなく善悪  
 是非一切のわづらはしきおもひ。ゆめのさむる可く何  
 事も打破れて。只我もなし。さきの天然の私なき心ばかり。  
 あらはれて了く分明なり。此上に於て。又萬のおもひの浮  
 べとも。すべてわづらひなし。たとへば。かゞみのうへにも  
 ろく。の影のうつる可く。水中に月の光のあきらかに  
 見がと。是心にも非ず。是色にもあらず。是念にも非ず。是  
 境にも非ず。畢竟トて何にも非ず。是を真心とも云。正念と  
 も云。佛境界とも云。常住法ともいひ。本來面目ともいひ。教外  
 別傳ともいふ。千生万劫生滅するに似たりといへとも。終  
 に生滅にあづからず。處に隨て去來自在一切さはりなし。

是を眞實の極樂世界。安養の淨土。大寶の藏。無爲の都とい  
 ふ也。かゝるありたきを信じて又うたがはずさきに  
 おめすそく。坐禪工夫せば。たとひ今生にてせとるをな  
 といふとも。りんじうの時。正念に住して去べし。さらに悪  
 道におつべからず。すみやかに身をかへて貴人に生れて  
 少より佛法修行して。やめてさとる人となりて。一切の衆  
 生を導き。人天の大導師となるべし。相かまへてうたがふ  
 べからず

示妙光禪人

先日十八首の高詠。意句絶妙にして。殊に心目を驚かす。よ  
 つて法語一篇説示せんをうけたまはる。山野老病相侵  
 して。晨夕平臥し。身心昏蒙にして。只痴兀にまかするのみ



なり。法かつてとらず。語も又會せず。さらに何をかとき。又  
 いかゞあめさんや。あかりといへとも。只此あらずるせず。  
 三世の諸佛もつひにいかんともせず。歴代祖師も氣をの  
 み聲をのむ。盡大地の人。さらにいつれの處にむかつて摸  
 索せん。這裡にいたつて。汝いか、測度と。いか、參取せん。  
 山僧即今恁麼に道平生の肝膽底をつくとして。かたおけお  
 はわり。なんぢかへつて會すや。若又根思遲回にして。譬地  
 なる事あたはずんは。只此不知不會のところについて。十  
 二時中行住座臥。茶裏飯裡。笑裡語裡。一切の所作所爲のと  
 き。大勇猛の志を起し。急ぐにまなこを付て。念くは是は何ぞ  
 ときはめ見るべし。凡覺道の人。此不知不會の所に於て。直  
 下に透得する事あたはず。或はすて是に不知不會。又此何

をかきはめ。何をかさとらんとおもふ人もあり。或は不知不  
 會とおもひてす。みえざる人もあり。或は是を空劫已前  
 の事と思ひ。或は今時日用の心とおもひ。或は万法の自性  
 とおもひ。或は本來の面目とおもひ。或は即心即佛とおも  
 ひ。或は非心非佛とおもひ。或は不是心不是佛不是物とお  
 もひ。或は山は是山。水は是水。柳は緑花は紅とおもひ。或は  
 全體作用とおもひ。或は教外の玄機とおもひ。わつものに口  
 をひらけは訛念を動すればそむくといひ。或は人に一問  
 せられて。棒を行し。喝を下し。近前又手と袖を拂つて去。種  
 々の伎倆をなすものあり。あくのことく。もうくの異見  
 邪解。稱計すべからず。皆是天魔外道の心也。かくのことく  
 邪路におちて正道をくらす。只今生一世のみにあらず。千

生万劫生死の海に浮沈していつるもあたはず。是れまよ  
憐愍すべきもの也。此れ只まよのこゝろさしなまよよりて  
命をすつるまよにて。いたるもあたぬ。ひとへに。まよねん  
まよさるをもつて。佛法をあてひ。ひかるまよつてなり。  
是れ故に鈍根蒙昧のものは。いゝまよ。鞭策すれどもおどろく  
心なし。或は智慧なきまよよりてすまよ。まよひしりける  
分劑のまよを。至極とおもひて。さらにすまよ。心なし。又利根  
聰明のまよの。實すくなく。虚おほきによりてしらぬまよを  
しらぬまよとおもひ。あきらめぬまよを。あきらめたりとおもひ  
て。種々無盡の妄智をおもひ。いたらすまよ。まよはぬところま  
よも。料簡分別して。佛法世法においてくらまよなく。不審  
なしとおもへり。まよる衆生の。千佛出世すとも。方便ある

べからず。いゝまよ。いとすまよ。是れ最初志うすく。善知  
識に遇ぬによりて。邪正辨ト分す。我心はかりを本とする  
により。まよのまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよの  
信取せば。さらまよのまよのまよのまよのまよのまよのまよの  
かさねてあゆみをすまよ。信力きはまる時。いよまよ。志を  
はけんまよ。精神をつくまよ。肝膽を瀝て。まよはめまよ。見よ。か  
ならず。無心の中。忽然として。身をひるがへす時。節あるまよ  
と。此時は。トめてしらぬ。山僧の。不知不會といふ語は。汝の  
眼を。瞞却する。悪毒。汝の身を。縛殺する。繩索なる事を。しら  
りといへども。不因樵子徑。爭到葛公家。まよをまよへ  
示在家女人  
我心本來是佛なり。千生萬劫。いつてまよへるまよ。迷へ

ることなければ。又さとりべき法もなし。すては迷悟な  
 れは。天真にして。もと生死をはなれたり。生死をはなれた  
 る可ゆある。来るも来る處なく。去も去處なく。住するも住  
 するところなし。三世の心不可得なる可ゆある。一切諸法  
 皆をなすく解脱せり。何の無明のつくすべきある。何の  
 煩惱の斷すべきあらん。善悪なき可ゆえに。地獄天堂も  
 なし。邪正なき可ゆえに。佛界魔界もなし。心念生ずる處ま  
 つたく不生なり。心念滅する處まつたく不滅なり。此故に  
 一切萬法有情無情畢竟空寂也。かくのそく本來の法を  
 らず。て。只目前の相よおいて種々無盡の妄念を起して。  
 生死なきよ生死を見。迷悟なきに迷悟をわらちて。生々世  
 々輪廻の業たえず。このゆえに法華經に。舍利弗當知鈍根

小智人着相驕慢者不能信是法といへり。是故に龍女の成  
 佛は。はじめて佛となるよはあらず。只本來是佛なること  
 わりをあらはせり。實に男女の相ありとおもふべからず。  
 このゆえに龍女變じて。男子となるといへり。又本より迷  
 悟なき可ゆえに。即南方無垢世界にゆくといへり。あくの  
 そく身心本來清淨なるを直に信せば。たとひ今生にて  
 さとりとなしといへども。此信力よよりて盡未來際惡道  
 にあらず。成佛する事うたひあるべからず。

示慶中大師

諸佛出世祖師西來すべて別の事なり。只人よ本有の自性  
 を直指するのみなり。いふなるかこれ。本有自性ならん。見  
 聞覺知語默動靜乃至一切の作用。一切の境界。全く是なり。

わづらに念を起してうけおはんとすればすなはちへた  
ゝる。是故に臨濟門に入れば便喝と。徳山門に入れば便棒  
す。あゝ擬議思量のおよぶとよろならんや。汝只恁麼に見  
よ。此外さらになにの事をかとかん

又示

佛祖一段の大因縁。天と蓋地におほふて。周徧せざるとこ  
ろなく。いよとへまわたり。今よわたりて断絶の時なき。是  
有心無心の境界よあらず。あゝ思量分別の及處にあらん  
や。故に古來明眼の宗師人の爲よするよ。機前よ直截して。  
擬議を入ず。電轉と。星飛ぶと。僧問雲門。いかなるりこれ  
佛門云乾屎橛。又問不起一念還。有過也。無門云。須彌山。僧問  
趙州。狗子還有佛性也。無州云。無亦云。有。又僧問。如何是祖師

須彌山とは大  
山にして世界  
の中にあり。  
上は有頂の天  
なきはめ。下  
は金輪の際を  
きはむ

西來意云。庭前栢樹子。俱胝は。凡有所問。只堅一指。魯祖の常  
僧來るを見て。壁よむかつて坐す。臨濟は便喝と。徳山は  
便棒す。利根上智の人は。當下に身を翻して。舊路に行。手を  
那邊に撒いて。全機活卓く。地中下の人。根機運鈍にして。か  
くのそくなる。とあたはず。このゆゑよ。古人かりよ方便を  
まうけて。しばらく坐禪工夫をす。むるものなり。いかも  
坐禪工夫をなすといへども。さとるをおそくして。やゝも  
すれば。十年二十年をふる人もあり。又は一生の中。つひ  
よかあはずして。むなくおはる人もあり。是皆正信なく。  
まその志をきよれり。洞山問僧。世間なよものか。もつ  
とも苦なる。僧云。地獄もつとも苦なり。山云。ちよくいまた  
これ苦ならず。袈裟の下よあつて。佛法をあきらめぬ。人身

をうしなふ。これ大なる苦とすといへり。先此意をよく  
 くおもひわくべし。それ在家の人は無量の重罪を作り。  
 口業ふろくして。地獄餓鬼もろくの悪道よおつといへ  
 ども。不思議なる佛法の縁よあふて。うろみいで。又人身を  
 うくるともあるべし。出家の人の無道心なるは。佛の衣鉢  
 をぬすみ僧比丘尼のすめたを似するばかりにて。徒よ信  
 せず。おどろかず。善知識のすめよあへどもおどろかず  
 おそれず。只おの情を本として。おもふやうに。ふるまひ  
 懶惰懈怠にして。無慚放逸なれば。今生一世のみよあらず。  
 たとひ無量億劫をふるとも。佛法のたねもなく。縁もなけ  
 れば。道心のおこること。すべてあるべからず。なほく人身  
 をうしなひて。悪趣よおづみはてなんぞ。是大なる苦にあ

らずや。佛も無縁の衆生を度したまはねば。いかなる慈悲  
 方便もかなふへあらず。まことに憐愍すべきものなり。よく  
 のとき道理をおもひつて。大誓願精進力をはけまして。  
 正信をおおし。まとのこゝろさしをすゝめて。今生よて佛  
 法をあきらめんとおもふべし。そもいかなるり正信  
 とならば。只一切の思量分別諸の道理をはなれたるとあ  
 ろを。佛法よ入る路頭と先信すべし。たとひかやうよ信を  
 れども。又まとのこゝろさしなければ。これをさとるとあ  
 たり。まとのあゝろさしといふは。もろくの道理なき時  
 如何る是教外別傳の處と。急にまなこをつけてきはめ見  
 るべし。あへすくすこともおこたらず。おはらくもおく  
 となく。行住坐臥一切の處一切の時よおいて。大なる愁歎

巨靈は。黄河の神なり。大神力あり。大た。神とて。るへし。

のある人のとく。念くわするべからず。古人是をたとへて。父母は一度はわかるむとく。我くびとせられんとするの。如くおもふべしといへり。かくのとく。親切は用心せは。工夫純熟してかならずさとする時節あるべし。此時はじめて知べし。金屑眼中翳。衣珠法上塵。巨靈猶不重。佛祖是何人。

示了仁居士

生死事大。無常迅速。百年の光陰一彈指のことく。此身のあたなるもの。風のまへの塵草の葉の露。またはいあすまのかげ水の泡のことし。いずる息入息をまたす。今日明日を期し。おたし。這裡たとひ榮華富貴。こゝろよまゐせて自在なり。といへども。只きのふのゆめのことし。ひさしくたもつへからず。今生のたのしみ。のならず後世の苦となる。一旦の

たのしみはこりて。永劫の苦をうくべからず。たましくうけおたき人身をうけ。あひおたき佛法よあふて。道心をもおこさず。佛法をさどらずんば。一度人身をうしなひて。なほく泥犁よしすみはてんを。かなたまさるべけんや。故に古人云。光陰箭のことし。時人をまたす。此身今生よむつて度せずんば。さらにはいすれの生にむつて。此身を度せんといへり。もし此身を度せんとおもは。先生死の大事をあきらむべし。それ生死の大事といふは。生ずれども來るところをしらざる。是生大なり。死すれども去ところをあらざる。是死大なり。故に生死事大ありといへり。此生の落處。後しらすんば。生く世に冥くたる暗裏よまよひ。茫くたる苦海よしづみて。六道輪廻の苦やむべからず。か

やうの事先よく〜おもひつて大誓願を起し。勇猛の志をすゝめて。生死の根源いかんときはめみるべし。生死の根源といふは。只我日夜よおこるところの心念なり。そも〜此心念いづれのところよりおこり。又いづれのところより去と。念くおこたらず急くにまなこをつけて見るべし。只坐禪のときのみにあらず。十二時中一切の事をなさん時も。あくのとき志を忘絶す。用心してみよ。工夫じゆんじゆくせば。りならず大よさとする時節あるべし。此時はじめてしらん。我此心念本より起るところもなく。さるところもなく。住する所もなきを。生死また〜かくのごとし。生まれどもと来る處もなく。死すれども實よ去ところもなし。現在も亦所住なし。三世の心不可得に

して蹤蹟なし。かくのごとく分明に悟り得れば。我此身衆生よもあらざ。佛にもあらず。生よもあらず。滅にもあらず。無始曠劫より。盡未來際にいたるまで。何の相もなく。何の道理もなし。これを一片く了くの田地といふ。此無心の境界よのなひ得れば。一切の相をやぶらず。よろづの道理をさらはす。縁よいたひ。物よ應じて。無量無邊の事を作用するなり。是を處にあたつて。主となれば。立處皆眞。我爲法王於法自在といへり。生死の中出入して。つひよ生死をうけぎ。苦樂の境相應して。又是苦樂の實なり。かくのごとく大安樂大けたつの身となるべき事もあらず。只何ともなき事をおもひふるまひて。いたづらよ月日をおくり。むなく此身をすてん。まおとよあはれむべきものなり。相り

まへて。かやうのとよくくおもひ知て我心の師となつて。我心を本とせず。時よく我身をいましめ。はづりめて。用心綿密なるべし。後悔をのこすとなわれ。記取せよ

示宗真居士

諸佛出世。祖師西來。かつて一法の人よあたふるな。只人本有の自性を直指するのみなり。それ本有の自性とは。教家に沙汰する處の理性の氣よあらず。直よ是教外の宗旨全體作用の處なり。さらに擬議思量の及所よあらず。是故に古人はづかよ口をひらきていかんと問ハ即喝。即棒。或は推出。或は踏倒す。徹骨の慈悲。老婆心切なり。何の恩力か。是にをよはんや。上根利智のひとハ。當下身を

朕跡  
ひくるも  
あらはるも  
其あとなし  
畢落佛の衆生  
のこてはない

ひるのへして。朕跡をとめず。頭を天外にめぐらして。呵々と大笑するのみ。何の禪道佛法。迷悟凡聖の見あらんや。大千沙界海中。遍万象森羅紅爐雪中。下の根機は。かくの如く。直下に穎脱するを不能。是故に古人やむをえず。まけて方便をたれて。坐禪參學工夫用心をす。坐禪參學工夫用心。又是別の道理なり。只直に見直に行ずるところなり。初心の人。是をいらす。坐禪工夫の様を知識に參じて。其をへのごとく用心して。得法悟道すべき様に。おもひなして。や。もすれば。死摸様を尋ていかなる公案にて。我に。しめいたまへと云。近代此風もつともさかんなり。もしかくのとくにして。佛法をあきらめんとおもは。大に棒をあけて。日をうたんとするに似たり。いづれの日。いづれ



の時。打あてん。又空中に梯を布て天にのほらんとする  
がとしいづれの劫にかのほり得べき。愚癡なる人の佛法  
に入て。むなしく幸苦は有りて。終に成ずるをなきもの  
くのと。實に。あはれむべきものなり。汝先よくかや  
うのをとおもひわけて。骨にとほり。髓にとほる底の深切  
の志をはけま。大誓願をおこして十二時中行住坐臥一  
切の事をなす所において。念くにおこたらず急ぐにまな  
こを付て。直に見直にすゝんで。第二念をおこさず前後左  
右をかへり見せ思量分別もろくの道理をなす事なか  
るべし。ゆいかくのとくねんころに用心せば。工夫純熟し  
て。工夫の心自盡るとき。あならせ忽然として夢のさむる  
がとくよして。大悟の時節あるべし。疑ふことなかき

答信秀禪人

坐禪工夫をなす時。只昏散はありて。即心即佛よなり  
得べき。もと昏散もなき時。即心即佛とも。本分のところとも  
いふべしや。別は得法とて。さとりをひらく時節あるべし  
や。と。うけたまはる。それ昏散は。本よりきらふべきよも  
あらせ。昏の時の全體只是昏散の時は全體只是散一よあ  
らせ。二にあらず。同なく。又別なく。即是を即心即佛とも。現  
成本分の事とも。本來の面目とも。天真の自性ともいふな  
り。迷人は只此直體をあらす。やゝもすれば。分別をおこし  
て。昏散をさらひ。昏散なき所にむろえんとす。此心みつら  
らおのれの障礙をかすがおゑに。古人是を昏散二病とい  
ふあり。もと直心をさとらば。さらに何の病のあらん。一了

一切了。一明一切明。心不可得。念大解脱。此外さらし生  
 死去來の相をもとむるよえぎ。一切の諸法。本來寂滅なり。  
 かへす。昏散なきところを。即心即佛。本分の處とおも  
 ふべからず。かくのことくおもへば。二法となつて。一心の道  
 にまよふ。もし此心を生せば。自邪魔の見解をあて。なご  
 く黒闇地獄におつべし。おそるべし。又別に得法として  
 さとりをしらす時節あるべきもの不審。是迷倒の見。正信  
 の道をしらすによる。只一念解脱すれば。即本來迷悟な  
 らず。心をもて心をもとむるをなかれ。衆生顛倒して。おのれ  
 にまよふて。物をおふといふは是也。只須昏散の二病を管  
 せぎ。直に一切の分別を截断して。二度念をつぐす。たけく  
 精彩をつけて。死よいたるまでかくのことく工夫をなすべ

六道 畜生 修羅 天道 四生 胎生 卵生 濕生 化生

も。かならず佛祖の言教の外に透脱一路を得へし。たとひ  
 又今生にて悟事おそくと。如此行せば。六道四生の苦を  
 えなれ。かならず清浄大解説の寶所に至るべし。疑事をわれ

答在家人

凡坐禪工夫は。初より何の道理をもこゝろにかけずして。  
 只佛法をあきらめんとおもふこゝろを。命にして用  
 心せば。極來り極去り。佛法をあきらめんとおもふ心も。  
 おのづからわすれれて。只身からたばかりの立とた  
 らくがことくなる時。さとらんとおもふ心もなきに。た  
 ちまちま夢のさむるをことくなる時あるべし。此時有無  
 生滅の諸の道理にかゝらぬ。別に透脱の活路あり。初心  
 の人はかやうの事をしらす。尋常の心にはりて。或は無

とおもひ。或は空とおもふ見のうかぶを。まとのさとりと  
 おもふて。真正の善知識もあはず。我胸中。早あきらかな  
 りとおもふて。慢心浅おますゆえに。かへりて邪魔となり  
 て。つひには無間におつる。かやうの悪見の者は。無道心な  
 るものより。はるるよおとれり。其故は。無道心なる者は。  
 不思議の縁にあふて。初より真正の善知識にすゝめられ  
 て。佛法よ入路。正き事もあるべし。かくのとく悪見の者は。  
 わが辛苦してさとりのいでたるものなり。善知識よ浅しへ  
 られたるにもあらず。又人より傳たるにもあらず。是を教  
 外別傳とおもひて。人のいふをも用す。只我情を本とす  
 るに依て。悪道にをつるなり。古人是を善因なりといへど  
 も。かへつて悪果をまねくといふは。是なり。辛苦して正法

をこそあきらめさらめ。結句地獄におちんてかあし。つゝ  
 とまざるべけんや。先のやうの事をよくくおもひわき  
 て。初より道理をなさす。赤子の有とも無とも。世法とも。佛  
 法とも。しらざるものとく。何ともあとも。心にあておはずと  
 て。只道心ばかり。眞實のさとりをとをもひて。さとりと待  
 こゝろあるべからず。さやうにおもへば。さとりを待心よ  
 へだてられ。すみやうにさとるとあたはせ。只身心をはな  
 つて。なにともならはなれ。又我心に立かへりて。有とをも  
 ひ。無とをもひ。又何者か我主とおもふ。よろづの道理をな  
 さす。十二時中行住坐臥。ねんころよ用心せば。必く大願成  
 就すべし

示宗通居士

夫心まよへば。佛すなはち衆生となる。心さどれば衆生す  
 なはち佛となる。是故に佛と衆生と。まつたく別あり。只是  
 迷へるとさどれるとの見異なり。迷悟の異見なけば。心  
 よもあらざ。佛にもあらず。物よもあらず。一切の道理をは  
 なれて。通身一條の生鉄のごとく。出生入死。只是暫時縁に隨  
 ふのみなり。去來なく。蹤跡なく。所依なく。所住なく。鏡の像  
 に對するのごとく。谷のひびきをうくるに似たり。内は主宰  
 なく。外縁縁なし。地獄天堂。心よまかせて遊戯し。苦樂逆順  
 ところにたがひつて自在なり。何の生死の可恐かあり。何  
 の禪道の求べきあらむ。大千沙界海中泡。一切聖賢電拂  
 のごとし。這裡に至つて。手を那邊千聖の外に撒じ。歩を今時  
 塵勞の中。廻らして。道理なき處に於て。道理を立し。是非

なき中に於て。是非を辨む。是世間迷倒の凡夫の實有の執  
 見にあらず。只無心の處に於て。一切の事を成敗す。是を世  
 間出世間能事畢る底の大丈夫の漢といふ。佛祖終に他の  
 落處をいらす。魔外争か渠の蹤跡をうらむはん。汝若恁麼  
 に承當し去ば。曠効の無明煩惱一念の中よとく消滅  
 して。七通八達大解脫大安樂の人と成べし。それなほいま  
 たしらせんば。いはらく歩ををりぞきおのれよ付て。わ  
 ら此心源如何ときめ見るべし。只坐禪の時のみにあら  
 す。十二時中行住坐臥見聞覺知着衣喫飯乃至一切の事な  
 すところよ於て。急くにまなこをつけて。直に見直にさは  
 めよ。工夫純熟せば。必大に透脫する時節あるべし

示簡入禪人

四大元主無吾蘊本來空たどひ父母の縁をり。一旦生ずるに似たりといへども。實に生ずるものなり。又人間の縁つき。さんじ滅するに似たりといへども。實に滅するものなり。是を水中の月。鏡裡の像にたとへたり。其相あるに似たりといへども。只是光影のみなり。まとの主なり。是をさとする人は。生死をもおそれず。涅槃をも愛せず。煩惱をも断せ。菩提をももとめず。出生入死。遊戯自在。逆行順行。妙用無碍。千生萬劫をふれども。終に轉變の理あり。只是性にまかせ。縁に隨ふのみなり。迷倒の衆生は。如此の道理をあらす。只目の前の相にまよはされて。色にふけり。聲に着し。香を愛し。味をこのみ。諸の相に依りて。執着のこゝろふりくして。頼はなる。事あたはず。是を生死のきつなといへ

り。たとひ又やりの世間の相もろくの欲念をおそるゝ人も。生死なき。實に生死ありとおもひ。諸の相なき。諸の相ありとおもふより。いよゝまよひまよひをささねて。直下は心念をむとあたはず。是故に諸佛祖師の善知識出世して。教導して直に見直し。聞直し。行直し。直にさとらむ。上根の人。直にうけひて。又重て生死の念を断ず。一切の疑心。當下に即止。是を立地成佛する底の人といふ。中下の人。かくのそくなる。とあたはせ。やゝもすれば。道理において執心たえ。是故にあはらく念ををさめ。心をやめ。一切に思量して。坐禪工夫せよとおしふ。此おしへにたがつて。又重てうたがえず。もろくの道理思量を断じて。大死人のそくなにのこゝろもなく。直に

用心せば。本來の面目脱躰現成せん。如此一念の信心堅固にして。第二念なくんば。只是今生のみにあらず。生く世に悪道におちず。大解脱大安樂の人となるべし。さどひ又命終の時。いりある病苦死苦。つよくおりと。乃至無量の善悪の境界現きとも。一念動せず。もろくの相を目よかけず。何ともおもえおしておはらば。即是生死せつだんの時節なり。うたふとあかれ

示道漸居士

我身本來實なり。只父母の縁よりて。四大かりに合成するのみなり。四大といふは。地水火風なり。地大といふは。髮毛爪齒皮肉筋骨垢色也。水大といふは。唾涕膿血津液痰淚大小便利也。火大とは。煖氣也。風大といふは。動ずる相なり。此四

大和合して。中に縁する氣あるを。慮知の心と名付たり。此四大分離する時。水は本の水よかへり。五體かはきてうるほひあじ。火は本の火よかへり。遍身ひえてあたゝかなる氣なし。風は本の風よかへりて。全身すくみてはたらき。然してのちよ燒あるひは埋めば。本の土よかへる。縁氣の心。四大分離する時とも。散滅に歸す。まよへる凡夫は。此四大かりに合するを。實に生かと思ひ。此四大もとよかへるを。實に滅すとおもへり。是故に生死なきよ生死を見。身心なきに身心ありとおもふて。我見偏執の心深し。是故に輪廻の業報たへず。これをささる人は。四大の相は空裡の花のごとし。有よ似たりといふとも實なし。生死去來も。またくかくのごとし。一切の諸相は。夢まぼろしのごとくなり

とさとりて。万事よおいて。執着の心なし。執着の心なければ、生死頼にたえて。輪廻をなくやむ。先かやうの道理をよくよくおもひとりて。坐禪工夫すべし。坐禪工夫の時又別の用心なし。たゞなにともあてがひはかるこゝろなくして。直に行きべし。此時取付どころもあく。方所もなく。路たえてすゝみがたしとおもふて。たいくつするをなかれ。もし方所あり。取付所あらは。此即生死の根本なり。よろくの道理をはなれて。なあとおも。かともあてがひのかるべきをなさところ。即生死をはなる時節なり。如此直に信じて。生涯うたがはず工夫用心せば。生死到来の時かならき力を得て。正念よ安住してをのるべし。まれ茂おもへ

示豫州大守

即心是佛。外にむかつて佛茂たづぬべからき。即心是法。別よさらし何の法をかもどめん。一句截流万機。寝削す。上智の人ハ言下よさとりて。一切疑心頼にやむ。鈍根の者はかやうのと茂きけとも。直に信せず。只是難行苦行。久功茂つみてのちに佛となるべしと思て。朝夕佛を念じ經をよみ。焼香禮拜散花行道あるひハ布施持戒忍辱精進の行をなす。あるひは一向長坐不臥。觀念觀法す。愚痴の甚者は。食を断す。是只今生よて直よさとるべき事をば。おもひもよらす。ひとへよ後世の成佛を希望するのみなり。如此の佛法を。遠くおもひなす心あらは。たとひいかなる身命財をすつる苦行をなすといふとも。皆是有相執着の邪信なるよ

よりて。つひに正道を成すへからず。たとひ一旦果報力を  
 得て。位たつとく。徳すぐれて福樂心にまかすといふとも。  
 善力盡ば。又かへつて悪道よおつべし。古人是を住相布施  
 生天福猶如仰箭射虚空。勢力盡箭還落。招得來生不如意。爭  
 似無爲實相門。一超直入如來地といへり。先かやうの道理  
 をおもひわけて。有相の佛をのぞむべからず。たとひまた  
 即心是佛を信する人も。根機遲鈍なるによりて。直に透脱  
 するを不能た。外は佛をもとむべからず。我心即佛あり  
 と信するばかりなり。あるひは即心是佛といふは。別の道  
 理なり。色を見。聲を聞。乃至一切の事をなすところ。只その  
 まゝにして。ふたゝひ念をつゝさる。即是なりとおもへり。  
 かくのとき人は。只是推量の信にして。實にさとらされば。

只口に即心是佛といひ心に。即心是佛と觀するばかりに  
 て。底に透て。休歇する分なし。是故にやゝもすれば。疑心起  
 て。是ばかりにて。よもあらじ。此上に猶も様をあらんと。  
 おもへり。此思にさへられて。本心をくらすをいらす。  
 或はまその道心はなくして。なまゝひに小智慧ありて。利  
 根なる人は。高禪の伎倆をこのんで。即心是佛といふ法門  
 は。只是小兒の啼を止る分劑なり。一向にまよへる在家等  
 の人のためには。かやうの法門をもつてすゝめみちびく  
 方便もあるべし。佛祖向上那邊の「着」をもつて。是を見  
 は。あさくしてあさし。是等の法門をさとりて。至極とおも  
 ふてやむ人は。まゝに佛祖の骨髓をうるべからずとおも  
 へり。是増上慢の心にて。實悟なければ。多くの多くの人は。



外道天魔の眷屬となるべし。むろし大梅和尚問馬祖大師如何是佛。馬祖答曰。即心即佛。大梅言下。大悟して。疑心頓にやむ。獅子一滴乳。迸散十斛。乳ある時。僧來つてかたつて云。近日馬大師法門別也。人に示すに。多くは非心非佛と云。大梅答曰。此老漢人を惑亂して。猶未止とあり。さもあらはあれ。非心非佛。我は只是即心即佛と。實悟の人。りくのこくとく脚實地をふみて。つひよろうべをめぐらさず。又水潦問馬祖。如何是西來の意。祖云。禮拜着せよ。水潦わづりに禮拜。祖乃當胸に踏倒を。水潦忽然として大悟。起來て撫掌呵く。大笑云。也大奇くく。千百三昧。無量妙義。只向一毫頭上識得。根源去。行到水窮處。坐看雲起時。と。それより後凡所問。あれは。只呵くと大笑するのみなり。かくのこくとく底

を盡して打翻せば。何の佛法の勝劣。公案の淺深。這邊那邊。向上向下を論せん。上士は一決一切了。中下は。多聞多不信といへり。只是猛烈の志ある人は。そこばくの功行を勞せず。一言一句の下において。直下に截斷して。又るさねて疑心なし。もいまた志よわく。機鈍なる人。かくのこくとく。穎脱する。とあたはずんば。只念く志をすゝめて。時くさしおかず。心とも佛とも。何とも。あてひはらさず。こゝろさしを命とし。願をちあらとして。路なきところ。にむかつて。あゆみをすゝめて見よ。ならすおほえず。らさる。うち。十方虚空身に和して。一時に打破する時節あるべし。此時は。トめてあらん。即心即佛。非心非佛。乃至一千七百の公案。及百千の法門。皆是門をたゝく瓦子なりける事

を。是故に骨を粉にし。身をくたきても。いまたむくふるに  
たへず。一句了然として。百億をこえたりといへり。實に是  
佛祖の方便教導に依ぜんは。いつれの劫にか生死の苦患  
を免て。大解脱大安樂の田地にいたるべき。此恩徳何を  
つての報トつくさん。針芥相投するにたとへ。實に疑ひな  
し。如此我身の大願成就し。一切満足せりとおもふべから  
ず。猶無縁の衆生を度しつくし。同く佛道を成せしめん  
とおもふ大願おこして。在家出家一切の人をあはれみ。めく  
み。すくひ。みちびく。大慈悲心をおこすべし。是まその佛祖  
の弟子。末世再來の菩薩なるべし。つとめよ。

示明貞道人

我此身心全體本よりまよはざるものなり。是故に是を名

付て佛といふ。夫佛といふは。相好いつくしくして。光明か  
り。やま。飛行自在。神通變化あるをいふにはあらず。やう  
の佛は。只暫時愚痴なる凡夫のため。殊勝の相を現して  
信を生せしめて。眞實の道にいれんがため。方便なり。ま  
その佛といふは。有相の形にあらず。もろくの着心なく  
して。念く精進なるこれなり。我此身もまよに相ありとお  
もふべからず。四縁かりに和合せり。四縁といふは。地水火  
風也。此地水火風相あるまは似たれども。實に相なし。夢幻  
泡影のごとく。此四縁かりにあはして人となれば。我まあら  
ざるものを實し。我なりとおもふて。我執ふかし。是故に我  
ままたおもふものを愛しよろこび。我ま背くものをにくみ  
そねむ。此心悪道の業となりて生く世に輪廻の苦たえず。

是も亦別の物にあらざり直に佛也といへども愚痴なる人はすべて信せず用ふべからず是故に釋尊韋提希夫人のたためた西方極樂世界阿彌陀佛を信じて念佛稱名し觀相をあらさは臨終の時かならば引接せられて決定往生すべしと説けり是を信してひとへに他力をたのみ念佛せばいかなる極重惡人も佛法の縁たえず後にはかならず極樂に往生して十二大劫はちすのはらにはらまれて其後觀音勢至等の菩薩の大乗の法を説を聞てはしめて菩提心を發すべしといへり我心即佛なる事を信せざる人の爲に機をもらさざる方便にてかやうに説くはもつとも肝要なるべしをあらざりも靈性ある人は十二大劫の後にはしめて道心を發すべきを遠くと待べきにもあらず

只眞直に道心をおこして頓に佛法を明らかむべしかくのごとくならは釋尊彌陀のをむへの本意にかなふべしを佛を頓に明らかめんとおもはゞ只一切おこる所の心念よろづの行跡是皆佛なり如此直よむめせども猶疑あつておもひへたつる心あらば先一切の心念をやめて何ともおもはらざる所よむかつて坐禪工夫すべし心をあつめて坐禪すれば何ともなきおもひまあく起りさては睡るばかりなり念のおこるもねふりの來るも皆佛の心なりすべて別のものよあらざりと深く信じてさらひいとふころあるべからずこゝにおいて又なよともしらされは茫々やみくとして取付ところなくすむべき路なしとおもふて退屈する事なれば若少も取付所あらは生死のまづななりなにとおもはらざる處即生

死を出るみちなりと。ふかく信じて。又うたがはず夢のさ  
 むるかごとくにして。一切のうたがひ。たちまちやむ時節  
 あるべし。此時初て。我此身心何ともあらざりける事をさと  
 りて。大に笑ふべし。又たとひ今生にてかくのごとくあま  
 らむるをとおそくとも。此信力つよくは。業にひられて悪道  
 に不可落。又人身をうけて。少きより佛法に入て。速にさと  
 る人となるべし。うたがふをなかれ

又示

我心本より佛なり。佛といふは。まよはざる心をいふなり。  
 まよはざる所をさとりぬれば。一切佛菩薩皆一心に具足  
 して。別の體あり。ありといへとも。其徳よりして。しはら  
 く名を付かへて種々の名字かはれり。阿彌陀と云は。天竺

の語なり。唐土の言葉は。無量壽といふ。無量壽といふは。  
 はりなきいのちなり。無量壽といふは。生ずるに似たり  
 といへども。全く生せず。死するに似たりといへども。全く  
 死せず。生死なき所。即人々の自性をいふ。是を阿彌陀とい  
 ふ。薬師と云は。本より生死なき處を示すを。法のくすりを  
 もて。差別の病を治すと云。是故に生死なき所をさとりぬ  
 れは。もろくのやまひ悉くのぞかる。是故に薬師と名  
 付。寶生佛とは。萬法本より差別なし一切の有情無情平等  
 にして。さらに去來前後の道理なきをいふ。釋迦といふは  
 萬法本より不生不滅なり。是を諸法從本來常自寂滅相と  
 いへり。寂滅相といふは。有よもあらず。無にもあらず。善に  
 もあらず。悪よもあらず。生よもあらず。死にもあらず。迷よ

もあらず。悟もあらず。諸の妙相道理をはなれたり。此眞體を示を釋迦といふなり。是を四佛といふ。此外に眞言宗よは大日如來を立せり。大日如來といふは。万法の正體一切の根本なり。たとへは大日輪の虚空にいつる時。あまねく一切の境界をてらして。其あとなきごとく。觀音といふは。慈悲成體として。音聲を用とす。勢至といふは。正理にかなふて。其力を施すといふ。文珠といふは。大智をいふ。大智と云は。諸の料簡分別をはなれたる無智の智をいふ。普賢といふは。一切の万行をすゝめて。僧となり。俗となり。男となり。女となり。親となり。子となり。主となり。從者となり。よろづの人をたをくる行跡をなすを普賢といふ。地藏といふは。人々具足各々圓成せる心地を云なり。心地より一

切の諸法を出生す。たとへは大地の萬物を出生するごとく。虚空藏といふは。我心も身も外の境界も。皆實の體なり。猶と虚空のごとく。虚空のごとくなる處より。一切の諸法現む。是故と虚空藏といへり。かやうの佛菩薩皆一心の徳なり。まよへばこれを忘らすして。凡夫とおもへり。さては別佛なきを知るゆめ。外に佛ありとおもふべからず。又別の佛をたのむべからず。只一心正なれば念く。佛菩薩現前するなり。忘かりといへども。かやうの法門の暫く愚痴にして。まよへる人のために。名をつけ理をときて。眞實の處とさとらしめんがため。方便なり。眞實の處に至ては。佛もなく。菩薩もなく。心もなく。法もなく。迷もなく。悟もなく。もろくのやくそくをはなれたり。此處

を直に信じて。坐禪工夫せば。火のもゆる中。雪のたまる  
 ざるがごとし。いかなる道理なりといふとも。懐まかくべ  
 からき。たとひおもひつけたる習氣おこるとも。直まきつ  
 てすて。ふたゝひつぐ事なれ。三世の諸佛はさつ歴代  
 の祖師出世利生の本意如此うたふまなれ

示在家人

唯此一段大因縁。天よさきたち。地よさきたち。いにしへに  
 すぎ。今よ越凡聖の中の境界にあらず。思量分別も及ぶべ  
 りらず。是を名付て不思議の法といふ。此法人々に具足す  
 れども。みづからさとらざるによりて。日々に用ておらず。  
 盲人の終日大道を行て。みづから見ざるがごとし。みづか  
 ら見ざるゆゑに。是を信せず。又たつとびき。歩くに悪處よ

おもむく事。汝おほえず。只今生一世の身命をたすげんと  
 おもふばかりよて。種々無盡のわざをおぼて。日く夜い悪  
 業を増長するのみなり。今生一世の事は。たとひ百年のよ  
 はひをたもつとも。暫時の夢の中のたのしみなり。久くあ  
 るべからず。古人云。遠慮なければ。必近き憂ありといへり。  
 只暫時の妻子眷属の愛執。纒の五欲快樂よはたされて。一  
 生むなしくまきて。永劫悪道に落んとあはれむべきもの  
 也。在家の人はいかよも。あこしといへども。かやうのと  
 をおもひいらす。まして修行用心坐禪工夫して。今生にて  
 一大事をさとらんとおもふ人。百千人の中に一人もまれ  
 なり。佛力業力に勝されは。たとひ佛菩薩の慈悲方便ある  
 くとも。我つくれる罪の悪業重らん人をは。すべてくた

すぐへららぎ只自進はけますんべいかぞか生死を截断  
 すべき。そもいかなる方便をもつて生死を截断せん  
 とならば先大願力大信力をおこして十二時中萬縁萬境  
 一切事となす所についていかなるものか主人となつて  
 かやうのわざ成すぞときはめみよ。たとへば百万の軍  
 陣の中へ只ひとりあけ入て直に大將の首をとつて出ん  
 とおもふおとく。たけき志をはけま。直に進んで用心  
 せば必き無量億劫の生死の朝敵を亡し。天地さきだつ  
 底の我本來清淨圓滿大覺法王。急に現前あて。世間出世間  
 の事を成就して自在三昧を得て。生々世々大安樂なる  
 べし。うたふふとなかれ

示病者

我此身心本來生死をはなれたり。生死をはあれたるゆゑ  
 に。さらに又一切の道理なし。たとひ一旦父母の縁より  
 て。地水火風かりに合する。似たれども。不生の生なれば。  
 實は生ありとおもふべからず。又時節到來して。四大分離  
 する。似たれども。不死の死なれば。實に死する。とおもふ  
 べからず。只生死去來是非善惡一切の萬法夢幻のことし。  
 是故。金剛經云。一切有爲法。如夢幻泡影。如露。亦如電。應作  
 如是觀。といへり。只かくのことしをわりを信トてうたが  
 ふべからず。縦病苦死苦ありといへども。わくのことし。正  
 信を守りて。一念を動ぜず。病にまかせ。苦痛にまかせて。何  
 ともあてひはかるるなくして。をはるべし。ゆめ。今  
 生にて佛法をあきらめされば。後世何とやならん。

どうたのひおそるべからず。只何ともおもてぬころ。即  
佛法也。信せざれば輪廻の業となる。直に信すきは。即生死  
截断の處なり。うたのふとなるれ

示在家人

一切の道理。おのれを存する時。おこれり。己をわかれは。  
更し何の道理かあらん。只是物にまかせ。縁にいたるふの  
みなり。是凡にあらざ。聖にあらざ。又是もなく非もなし。天  
眞自在の受用。何の善悪をかえらはん。是故し。智者のもの  
まかせ。おのれにまかせず。愚人はおのれまかせ。物に  
まかさず。又逆行順行。天も計事なしといへり。若し箇の道  
理を信せし。見聞覺知。蹤跡をとめて。去來生滅。必竟不可  
得也。信心薄より。人惑せられ。境に轉ぜられて。主とな

り得る事あたひせ。や、もすれば。無量の分別をおこす。實に  
是愚人迷倒の妄見なり。持論をるにたへせ。すべからく身  
命を成しませ。たけく精彩つくべし。忽然として一笑せば。  
天廻地轉せん。うたのふとあるれ

答宰相中將殿問

問 紛飛の念おこる所よおいて。いゝんが工夫をなすべき。  
答 それ紛飛の念といふは。おこるものも。おこすものもな  
し。只眼病の者。空裏の花を見るがごとし。此花は眼よりも  
出す。空裡よりも生ぜ。只眼は病あるによりて。みたりに  
空花の相を見るなり。紛飛の念も。亦復あくのごとし。是故  
に。是を妄見といひ。又の妄想といふ。眼病なければ。妄見な  
し。分別なければ。妄想おこらず。只一切迷倒の見。妄心の



分別よれり。妄心おこらされば。一切の心境皆是正眞大道なり。於此直下に徹し去は。許多般あり。若又いまたあらすんは。只紛飛の處について。直下にこれをきえめ見よ。をらす透脱の時節あるべし

月菴和尙假名法語完

明治二十三年七月  
同年八月十八日再版出版

再刻

月菴大禪師假名法語一卷伏願障  
雲散而菩提月現業海枯而功德山  
高不入邪宗常生正念

著述者

故 月菴和尙大禪師

發校 正者

岡山縣平民

小松 慧



東京下谷區谷中四十  
四番地寄留 村

印刷者

東京 大石喜太郎

北畠茂兵衛

日本橋區通一丁目十五番地

發賣所

森江 佐七

麻布區飯倉町五丁目四十六番地

西京

出雲寺文次郎

三條通高倉東入

日本橋區南菜場町四十八番地

